

「中国・民衆法廷 裁定」 p.457-460

証言者 41 番：ディディ・カーステン・タトロー

―――

2019年2月23日 ベルリンにて

「中国での良心の囚人からの強制臓器収奪を調査する独立法廷」の判事団の皆様

中国でジャーナリストとして（ニューヨーク・タイムズで）働いているときに臓器移植について書いた数編の記事を添付いたします。

私の調査は何の既成概念もなく始まりました。中国の航空会社がレシピエントに間に合うように臓器を届けることに協力的ではないという報告がきっかけでした。この報告を追うことで、添付の記事が生まれました。

下記に私見と追加の4つの要点を提出いたします。

私見

個人的に違法臓器売買が行われているとは思っていますが、その規模と臓器源については今も確信がありません。死刑囚や良心の囚人だけではなく、行方不明の人々、暴力団に殺害された犠牲者、精神障害の患者など、あるいは健康な人が事故に遭いその親戚が臓器の代価を支払われた場合や脱走兵などもおそらく含まれるだろうと思います。数に関しては全く分かりません。

<https://dafoh.org/public-organ-donation-system-china-largely-depends-monetary-incentives-families-deceased-relatives/>

追加の要点

第1点：

2016年4月初頭、北京医院で行われた中国紅十字会（訳注：中国における赤十字組織）のイベントに参加しました。衛生省の高官が中国での臓器提供について語り、臓器提供者を追悼するものでした。4月5日は中国では死者を偲ぶ清明節ですので。午前中のイベントのあと、無錫市人民医院で移植を担当する肺外科医・陳静瑜医師（Dr. Chen Jingyu）と昼食に行きました。私は陳医師に関する記事を報道していました。陳医師は北京医院の肺移植医の友人も連れてきました。Tongという名前でした（Tong医師は「以前に肺移植をしていたが今はしていない。金銭的に採算が取れないので彼の病院では肺移植をやめた」と語りました）。他に環球時報の中国人ジャーナリスト、清華大学の学生自治会長で、医療問題を研究しているという修士学生も参席し、合計で5人でした。食事中、陳医師は、私の報道でかなりの迷惑を被ったと私を責めました。ワシントンDCでの重要な心肺移植研究会で、当初受理されていた彼のポスター発表が、死刑宣告された囚人を対象とした研究という理由で最近拒否されたということでした。陳医師はこのことは否定しませんでした。私の記事が彼に「迷惑」をかけたので私のせいだと言いました。私はポスタ

一発表とは一切関わりなく、死刑宣告された囚人のような自発的でないドナーを利用したために発表を拒否されたわけで、彼の責任であり私の責任ではないと告げました。

そこで陳医師は私に尋ねました。「では、どうしたらいい？」

「自発的でないドナーの利用をやめる（つまり 2014 年 12 月）と約束した以前に得られた結果を発表しないことですね」と私は答えました。

「そんなことは不可能だ」と言わんばかりに彼は私をじっと見詰めましたが、この件に関しては私にはこれ以上何も言いませんでした。

この会話に注意深く耳を傾けていた Tong 医師は、陳医師に向かって言いました。以下は、昼食後すぐに私の記憶を一言一句、記録したものです（この昼食は報道するイベントではありませんでした）。

Tong 医師：死刑囚は使えませんか？（死囚不能用嗎？）

陳医師：使えない。（不能用）

Tong 医師：良心の囚人は？（良心犯呢？）

陳医師：いずれも使えない。（都不能用）

Tong 医師はうつむき何も言いませんでした。陳医師も黙り込みました。

この会話から私は下記の結論を導きます。

- 良心の囚人が臓器移植に使われている（死刑を宣告された囚人の臓器を使っていることは中国国家が認めている）。
- 少なくとも一部の医学の専門家の間では、このことはよく知られている。
- 2014 年 12 月の「死刑宣告された囚人の臓器使用禁止」の発表は、有効ではなく実質を伴っていないようである。Tong 医師のような肺外科医が、禁止を認識していないように見受けられたからだ。実質的な禁止であれば、国も中国共産党も、重要なメッセージを宣伝・情報のシステムを通して極めて迅速に伝達できるのだから、彼が知っていると考えerことは妥当であろう。

第 2 点：

2015 年 11 月 16 日付の記事で、現在も死刑を宣告された囚人の臓器使用が続いていると私が報道したすぐ後、私を誹謗中傷する運動が国営メディアで始まりました。ある日、黄潔夫医師（訳注：中国臓器移植のスポークスパーソン）の事務所が私に連絡をしてきました（これまで私からのインタビューの要請には全く応答がありませんでした）。驚くべきことに私が黄医師をインタビューすることを受け入れてくれました。インタビューの場所に到着したら、すでに中国メディアのジャーナリストが二人いました（私と黄医師だけという印象を受けていたので、予期しないことであり不愉快な不意打ちではありましたが、インタビューを続けました）。2 時間にわたるインタビューの間、ジャーナリスト二人はほとんど口をきかず、黄医師とのインタビューを見守り

メモを取っていました。翌日、同一の報道が数多く中国メディアで流されました。誤報を流したとして私を責める内容でした。この報道の嵐は暫く続きました。何本出たか数え切れませんでした。

第3点：

約1年後、別件で警告のために外務省への出頭を要請されました。その場で私の対応相手に、臓器移植の報道について、国はどのような見解かを尋ねました。「報道しても構いません」という返答だったので、私は少し驚き「機密情報に近いのでは？」と尋ねました。「党の幹部がこの問題に対処すると必ず明記すれば構いません」（会話の流れから習近平を指すと理解しました）という回答でした。軍病院の制度とそこでの臓器移植手術について尋ねたら、彼女は凍りついたようになり、「そのことは一切知りません」とだけ答えました。

第4点：

最後に、当時の私の雇用主、ニューヨーク・タイムズは、私がこれらの問題を追うことを喜ばしく思わなかったという印象を受けました。当初、ニューヨーク・タイムズは私の取材の努力を容認していましたが、その後、私は、取材を続けられない状況に置かれました。同紙は私の2015年11月16日付の取材を大幅に改ざんし、遺憾なことに最後の部分を削除することで記事の意味を大幅に変えてしまい、私は北京の先輩記者から（不当にも）責められることとなりました。その後、続く記事校正は、確認の必要のため遅れた（と言われました）のではなく、編集者が気づかなかつたか他の仕事が多すぎたために時間がかかりました。結局、編集ミスが2ヶ所あり、報道ミスはなかったことが判明しました（私には報道ミスはありませんでした）。ある種の言い逃れに過ぎませんでした。かいつまんで言うと、シニア・エディターと個人的に話し合いやメールを交わしましたが、時間を要するこの領域の調査を続けたいという私の要請は基本的に無視されました。囚人の臓器を使ってきたことを中国が認め（2015年）12月14日にこれ以上は使わないと約束したことで、中国での臓器提供問題は解決したとエディターは信じているようでした。このトピックには「新しいニュースはない」と言われました。（陳医師とTong医師の会話に基づき）調査を死刑を宣告された囚人から良心の囚人へと拡げようとした時、別のエディターから、良心の囚人からの臓器が使われていると信じる人は「フリンジ（主流でない周縁）の人権擁護者」であり、合理性がないとコメントされました。法輪功は理不尽で信頼できない、などのお決まりの主張が提示されました。この問題を掘り下げることが歓迎されていないことは明確でした。確信はできませんが、地域担当エディターのアドバイスに反して、2017年2月、本部が私を昇進させないとした決定は、このシリーズ記事が起因していると疑心しています。2017年6月、私はニューヨーク・タイムズを退社しました。

以上は、私の記憶する限り、そして当時のメモに基づくものであり、全てが真実であり、実際に起こった通りのことであると明言いたします。

ディディ・カーステン・タトロー

原文：

https://chinatribunal.com/wp-content/uploads/2019/06/DidiKirstenTatlow_Submission.pdf